

令和 4 年 6 月 20 日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02809

研究課題名（和文）市民参画型パフォーマンス評価を導入した鑑賞プロジェクトの方法論の開発

研究課題名（英文）Development of a Methodology for an Appreciation Project that Introduces Civic Engagement Performance Assessment

研究代表者

濱口 由美（Hamacuchi, Yumi）

福井大学・学術研究教育・人文社会系部門（教育養成）・教授

研究者番号：80588559

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域美術館で学ぶことの意義や可能性などを協働探究する活動を通して、多様な市民の教育参加を促す評価活動を市民参画型パフォーマンス評価として提案した。地域、学校、美術館と連携しながら、多様な市民の教育参加を促す鑑賞教材やワークショップの開発を多世代（小学生からシニアまで）で取り組むといった、市民参画型パフォーマンス評価を導入した鑑賞プロジェクトの実践に着手した。鑑賞プロジェクトの実践記録を基に、より良い地域文化を形成していこうとする実践コミュニティの形成プロセスをドキュメンテーションとして公開した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

より良い社会を創造する主体、意味や価値付けをする主体となるための力（エージェンシー）が、「The OECD Learning Compass2030(学びの羅針盤)」の中核的概念として据えられた。エージェンシーを育むためには、多様な人との互恵的な学び合いが必要であり、地域の大人たちにも教育参加の責任が問われている。市民参画型パフォーマンス評価を導入した鑑賞プロジェクトは、次代における地域のウェルビーイングの実現を目指し、学ぶことの意味や可能性を協働探究しようとする地域コミュニティを形成するための方法の一つとして提案できる。

研究成果の概要（英文）：This study proposed Civic Engagement Performance Assessment, an assessment activity that encourages diverse citizens to participate in education through collaborative exploration of the significance and potential of learning at local museums. In collaboration with local communities, schools, and art museums, we have begun to implement an appreciation project that introduces Civic Engagement Performance Assessment, such as developing appreciation materials and workshops that promote the educational participation of diverse citizens in a multi-generational (from elementary school students to senior citizens). Based on the records of the practical implementation of the appreciation project, documentation of the formation process of a community of practice that seeks to form a better local culture was made public.

研究分野：美術鑑賞教育 美術科教育

キーワード：市民参画型パフォーマンス評価 鑑賞プロジェクト 選べる鑑賞シート アートカード ドキュメンテーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

申請者は、パブリックに開かれたパフォーマンス評価を導入した鑑賞プロジェクトを教員養成課程に組み込み、学校教員を目指す学生たちと鑑賞教育の学習指導のあり方を探究しつつ、実社会の課題と向き合いながら教職の専門性を培うことを目的とした実践的研究に取り組んでいた。パブリックに開かれたパフォーマンス評価をプロジェクトの活動指標として位置付けたことにより、多様な実践者（学生・国内外の教員・学芸員）たちが評価活動の参画者となり、学習者の美的認知の発達課題について学び合ったり、異文化理解といった地域社会と共有する課題を包含した鑑賞教育の可能性を検討したりしようとする協働実践研究の場が創出されることを成果の一つとして考察した。その一方で、「パブリックに開かれたパフォーマンス評価」と銘打ちながら、その評価活動への参画者が、美術教育に関わる学生や実践者に偏っていたという課題も残された。地域社会との協働・共創を目指そうとする鑑賞教育への転換を図るためには、現実世界での実践共同者となる多様な市民たちとも鑑賞学習の意義や可能性を探究することのできる評価の場へと改善されなければ、質的にもパブリックに開かれた真性の評価とは言えないのではないかとといった課題を見出していた。

学校教育においては、地域と連携・協働しながら地域に開かれた教育課程への転換を推進する新学習指導要領が告示され、生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質能力を育成する授業改善が求められていた。公立美術館においては、高齢化、情報化、国際化が進む社会の中で、多様なニーズや地域の課題に応える生涯教育施設としての役割が希求されていた。これからの鑑賞学習は、多様な市民とともに鑑賞学習の意義や可能性を探究し、美術鑑賞や美術文化の働きを地域社会の中で主体的に活かしていこうとするプロジェクト型の新しい鑑賞教育の提案が必要であると考えた。本研究では、多様な市民に開かれたパフォーマンス評価（以下、市民参画型パフォーマンス評価と記す）を導入した鑑賞プロジェクトの方法論を開発すれば、市民や保護者たちとも鑑賞学習を学ぶことの意義や可能性を模索する協働探究の場が生まれ、美術鑑賞の働きを活用して地域文化を共に形成していこうとする実践コミュニティが育まれるのではないか、といった仮説をもとに取り組んだ。

2. 研究の目的

- (1) 多様な市民が参画できる新たなパフォーマンス評価（市民参画型パフォーマンス評価）を考案し、多様な市民の教育参加と協働探究のプロセスを創り出す鑑賞プロジェクトの方法論を開発する。
- (2) 市民参画型パフォーマンス評価が導入された鑑賞プロジェクトの実践的研究に取り組み、地域文化を共に形成していこうとする実践コミュニティが、どのようなプロセスによって育まれたのか多様なドキュメンテーションとして表現する。

3. 研究の方法

- (1) 多様な市民の教育参加への自覚と責任を育んできたレッジョ・エミリア市におけるレッジョナラプロジェクトや北欧のレッジョ・インスパイア園等で実施されているPBLの事例研究に取り組み、多様な市民の参画を促す評価につながる事例の整理と検討を行う。
- (3) 福井市美術館や福井市内の公立学校及び附属義務教育学校とのこれまでの共同研究や連携活動をベースに、地域のコミュニティを活かした地域文化の創造を目指し、多様な市民に開かれたパフォーマンス評価が導入された複数の鑑賞プロジェクトの実践的研究に取り組む。

4. 研究成果

(1) 市民参加型パフォーマンス評価の基礎的研究

2019年度は、スウェーデンにおけるレッジョ・インスパイア園などを訪問し、園内に複数展示されていたPBLのドキュメンテーションに関わる資料などを収集した。これらに加えて、前年度までの視察で収集していたレッジョナラプロジェクトの資料を合わせ整理と検討を行った。その結果、保護者や市民の教育参加を促すパフォーマンス評価を開発するために参考となる次のような視座を得た。

・レッジョナラプロジェクトには、多様な市民の主体的参加を促すために、異世代交流や異文化交流を促し、新しい地域文化を形成していくための課題が設定された様々なステージ（評価の場）が用意されている。

・幼児教育やレッジョナラプロジェクトにおけるドキュメンテーションの作成と展示は、プロジェクトの活動を可視化すると共に、多様な人たちとプロジェクトの活動に対する主観的な意見や考えを交流させたり新たな意味を立ち上げたりする評価活動の場を形成している。

・レッジョナラプロジェクトや幼児教育におけるステージやドキュメンテーションは、レッジョ・エミリア市で有用されてきた多様な表現の言葉（言語の言葉のみならず、造形、音楽、身体などによる表現の言葉）を用いることで、自分とは異なる他者のイメージや思考を共感的に理解しようとする協働探究としての評価の場を創り出している。

このような基礎研究の成果をもとに、本研究では、規準や基準をあらかじめ設定しておく評価ではなく、他者の存在を活かし合い、自分とは異なる他者の思考に立ち、新たな活動の意味を協働探究していく評価活動を市民参画型パフォーマンス評価として位置付け、鑑賞プロジェクトの実践的研究に着手していくことにした。さらに、多様な表現の言葉を介在させた協働探究の場を創り出すための教材開発にも挑戦することにした。

福井大学教育学部附属幼稚園から発行した『すごいぞ、子どもの遊び！発見カルタ（カード20枚組 A5 サイズ・両面カラー印刷）・ガイドブック（A5 サイズ・袋とじ全16頁・カラー印刷）』は、市民参画型パフォーマンス評価の考え方を活かして開発した教材である。20枚のカードは、ドキュメンテーションとしての役割を担うことができるように、附属幼稚園教師たちが綴ってきた日々の記録と複数の活動写真を組み合わせ作成した。ガイドブックの作成には、市民や保護者も参加し、意見交流を促すためのカルタ遊びの手法を活用した評価活動の方法を考案した。これらの活動を通して、ドキュメンテーションの役割をもつ教材づくりのプロセスそのものが、教育参加を促す市民参画型パフォーマンス評価の場となるといったアイデアも生まれた。

『すごいぞ、子どもの遊び！発見カルタ』の発行後は、「免許状更新講習」「幼小接続研修会」等で活用し、教師の専門性を高め合う開かれた評価活動の場を創り出すことを確認した。また、『すごいぞ、子どもの遊び！発見カルタ』は、英語やアラビア語にも翻訳されており、コロナ収束後は、国際的な教師教育研究にも貢献できる教材として期待できる。

(2) 多様な市民の参画を促す鑑賞教材の開発プロジェクトの実践的研究

本プロジェクトは、福井市美術館常設展「高田博厚の世界」を市民の生涯学習を支える学習の場として活用していくための教材として福井市美術館との共同事業として立ち上げた。多様な市民の生涯教育への主体的参加を促すために、「知能の複数性」に着目したMI（多重知能）理論に基づくプロジェクトミュージズのエントリーポイントのアイデアを参照しながら、福井大学大学院教育学研究科院生を中心とするプロジェクトメンバーで、複数の学習の入り口をもつ鑑賞シートの開発に着手した。その成果、複数の学習の入り口をもつ教材として、「高田博厚の選べる鑑賞シート（哲学のとびら・物語のとびら・レシピのとびら・身体のとびらの4種類、いずれもA3両面、カラー印刷）」を発行した。

<http://www.art.museum.city.fukui.fukui.jp/takatakunnoheya.html#waku-kusi-to>

また、「高田博厚の選べる鑑賞シート」を活用したワークショップの実践記録をもとに、ワークショップ参加者の眼差しから捉え直した活動の解釈や意味を記したドキュメンテーションを組み込んだ「高田博厚の選べる鑑賞シート指導の手引き」を発行したり、「高田博厚の選べる鑑賞シート」の完成発表会（2019年10月12日：於福井市美術館）を開催したりするなどして、多様な市民に開かれた評価活動の在り方を提案した。

さらに、複数の学習のとびらをもつ「高田博厚の選べる鑑賞シート」を用いることで、どのような教育的可能性をもつ生涯学習の場が提案できるのか、鑑賞シートの内容や指導の手引きに記されたドキュメンテーションの検討を行い、研究論文「多様な市民の教育参加を促す鑑賞学習に関する研究—「高田博厚のえらべる鑑賞シート」の生涯学習教材としての教育的可能性を探る—」にまとめた。

<http://hdl.handle.net/10098/00028638>

(3) 「市民と創るラベリング美術館プロジェクト」の実践的研究

「市民と創るラベリング美術館プロジェクト」は、市民や大学生、学校の児童・生徒と教師、美術館の学芸員、大学の研究者たちが、「地域美術館で学ぶことの意義や可能性を多様な市民と共に探る」といったビジョンを共有しながら取り組んだ市民参画型鑑賞プロジェクトの協働実践である。次のような市民参画型パフォーマンス評価（①～③）を導入し、その課題探究のプロセスをドキュメンテーション化する実践的研究に取り組んだ。

① 大人と子どもが一緒になって楽しむことができるアートカードを開発する。

高校生はアートカードの作品撮影担当、小学生はカードゲームの考案といったように、アートカードの開発には小学生からシニア世代までの幅広い市民が参画した。

成果として、『ヒロくん（高田博厚）のアートカードセット（高田博厚の彫刻作品カード：100mm×148mm 32枚組・ガイドブック：A5袋綴じ冊子全40頁）』を300セット発行した。

発行までの協働探究プロセスを可視化するドキュメンテーションの作成を通して、アートカード開発には、他者との境界（見方や考え方の相違、対立やジレンマ等）に気付いたり、「参加」の概念や姿勢について再考させられたりする異世代間による相互育ちのプロセスが生じていたことを考察した。

②福井市美術館常設展示室「高田博厚の世界」を活用したワークショップを開発する。

福井市美術館常設展示室「高田博厚の世界」で学び合うことの意義や可能性を探るためのワークショップを開発するために、大学生や市民で構成されたワークショップリーダーは、高校生の活動協力者たちと共に、本プロジェクトで開発してきた二つの教材（「高田博厚の選べる鑑賞シート」、「ヒロくんのアートカード」）を用いて数回のワークショップづくり（プレワークショップ）に取り組んだ。自らの鑑賞活動を通して美術館で学び合うことの意義や可能性を探るためには、「自らの鑑賞活動をメタな視点から再鑑賞し意味付ける」ための振り返りの場が重要であるといったことを共通認識として形成した。

③福井市美術館常設展示室「高田博厚の世界」で学ぶことの意義や可能性を探るための展覧会を開催する。

地域美術館で学び合うことの意味や可能性をさらに多くの市民と探ることを目的として、福井市美術館常設展示室「高田博厚の世界」に於いて、『みんなで創るラベリン美術館「高田博厚の世界」-78億回完成する作品が、キミを待っている（2021年11月26日-12月12日）』を開催した。展覧会場には、プロジェクトスタッフたちが、①・②の活動を基に参加者との協働探究を省察的に捉え直し価値付けたドキュメンテーションと福井市美術館で学ぶことの意義や可能性を端的な言葉で表したラベリングとで構成された23枚のパネルを展示した。また、会期中には、展示室「高田博厚の世界」で学ぶことの意義や可能性をプロジェクトスタッフ共に探るワークショップを10回開催した。異なるコミュニティが1回ごとに形成され、そのつど新しい言葉や活動が創造される協働探究の鑑賞プロセスは、スタッフにとっても新しい自己を獲得する場になることが示唆された。

①②③の成果を元に、本プロジェクトの活動報告書『みんなで探ろう 地域美術館で学ぶことの意義や可能性』として編成し、「誰とどのような協働探究の場をつくり出してきたのか」「スタッフや参加者は、協働探究のプロセスから何を見出してきたのか」といったことを、多世代（小学生からシニア世代まで）の視点からそれぞれに捉え直すことができるドキュメンテーションとして表現した。また、報告書に記した小論「互恵的な学びの場を探る」では、多様な他者との協働探究のプロセスを創り出す市民参画型鑑賞プロジェクトは、「The OECD Learning Compass2030(学びの羅針盤)」の中核的概念として据えられた「エージェンシー」を伸ばすための互恵的な学びの場を創り出すことを、異世代間の学び合いに着目した複数のエピソードを基に考察した。

<http://hdl.handle.net/10098/00028965>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 濱口由美	4. 巻 45
2. 論文標題 多様な市民の教育参加を促す鑑賞学習に関する研究－「高田博厚の選べる鑑賞シート」の生涯学習教材としての教育的可能性を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福井大学教育実践研究	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高野牧子、濱口由美	4. 巻 15
2. 論文標題 レジヨ・エミリア市における芸術教育 「レジヨ・ナラ」を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 山梨県立大学人間福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 6件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 地域の中で育つ鑑賞教材「高田博厚のえらべる鑑賞シート」の研究
3. 学会等名 第59回 大学美術教育学会「宇都宮大会」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 福井市美術館を活用したアートコミュニティの創造-教育の観点から未来の地域デザインを考える
3. 学会等名 北陸4大学連携まちなかセミナー（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 絵の世界を旅してみよう
3. 学会等名 福井ライフアカデミー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 旅して見えてきたことは...
3. 学会等名 第三回YOKOHAMA国際美術教育会(Y.I.A)（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 アートの言葉で語り合う大人と子供の物語
3. 学会等名 第72回 福井県総合美術展（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 子供の造形世界探訪
3. 学会等名 小教研福井吉田ブロック図工部会・中教研福井吉田ブロック美術部会合同研修会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 濱口由美
2. 発表標題 レッジョ・エミリア市のキセキーレッジョナラ
3. 学会等名 福井大学教育内容・教材開発研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 山木朝彦他27名 濱口由美分担執筆	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ブックウェイ	5. 総ページ数 338
3. 書名 今、ミュージアムにできること	

1. 著者名 編集 濱口由美 著者 濱口由美他5名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福井市美術館・福井大学濱口研究室	5. 総ページ数 24
3. 書名 高田博厚の選べる鑑賞シート及び指導の手引き	

1. 著者名 編集 濱口由美 著者 濱口由美他2名	4. 発行年 2019年
2. 出版社 福井大学附属幼稚園	5. 総ページ数 14
3. 書名 すごいで、子どもの遊び！発見カルタガイド	

1. 著者名 編集・監修 濱口由美 著者 濱口由美他2名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 市民と創るラベリング美術館実行委員会	5. 総ページ数 40
3. 書名 ヒロくんのアートカードガイド(福井市美術館『高田博厚の世界』アートカード・ガイド)	

1. 著者名 編集 市民と創るラベリング美術館実行委員会 監修 濱口由美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 市民と創るラベリング美術館実行委員会	5. 総ページ数 52
3. 書名 みんなで探ろう 美術館で学ぶことの意義や可能性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------